

ジンポー語の資料と文法注釈 —人間の唾の力はなぜなくなったか—

倉部慶太

京都大学大学院／日本学術振興会

キーワード：ジンポー語、カチン語、チベット・ビルマ語派、カチン人、民話、ミャンマー

1 はじめに

1.1 本稿の目的

本稿の目的は、筆者がビルマのカチン州ミッチーナ市において行った臨地調査により収集したジンポー語民話資料のうち、「唾の力はなぜなくなったか」と題する民話資料の本文と文法注釈を提示することにある。1節ではジンポー語の概況、方言、本稿における表記法について記す。2節では民話資料本文を提示する。最後の3節では本文に対する文法注釈を示す。

1.2 ジンポー語に関する基本的事実

ジンポー語 (Jingpho) はシナ・チベット語族 (Sino-Tibetan) チベット・ビルマ語派 (Tibeto-Burman) に属する言語であり、ビルマのカチン州およびシャン州北辺を中心に分布するが、その分布の東端は中国雲南省、西端は東北インドにまで及ぶ (以下の図 1 を参照)。

ジンポー人は同じ民族意識を持つロンウォー Lhaovo (マル Maru)、ラチッ Lacid (ラシ Lashi)、ツァイワー Zaiwa (アツィ Atsi) などの民族とともにカチン (Kachin) と呼ばれる文化的集団を形成する。このうち、ロンウォー、ラチッ、ツァイワーなどの民族はロロ・ビルマ語支ビルマ語群に属する言語を話し、言語的にはジンポー人よりもむしろビルマ人に近い関係にある。しかし、カチン民族を構成する人々は共通の文化を持ち、ビルマ人とは異なるひとつの文化集団を形成している。このカチン民族において、ジンポー語は共通語 (lingua franca) の役割を担っており、ジンポー語はカチン語と呼称されることもある。

ジンポー語の話者人口に関しては、ビルマに 630,000 人、中国に 15,000 人、インドに 2,000 人の話者が居住すると推測される (Bradley 1996:751)。ただし、ジンポー語はカチン民族の共通語として機能しており、ロンウォー、ラチッ、ツァイワーなどのジンポー語を第二言語として用いる話者も含めるならば、ジンポー語の話者人口は 100 万人程度になると推測される。

1.3 ジンポー語の方言および本稿で対象とする方言

ジンポー語には少なくとも 17 の独立した方言 (または言語) が存在することが、先行研究および筆者の現地調査により明らかになってきた (Hanson 1896、西田 1960、劉 1984、Matisoff ed. 1996、Morey 2010、Kurabe 2014)。本稿でジンポー語と言う場合、このうちの標準方言

(Standard Jingpho) を指す。この方言は本来、カチン州バモー市 (Bhamo/Manmaw) を中心に分布する方言であったが、キリスト教の布教がこの地域を中心に始まったこと、1890 年代前半に考案されたジンポー語正書法がこの地の言語を基に制定されたことなどの事情から、後に他の地域へも普及した。ジンポー語話者はこの方言をバモー・シンリー語 (Manmaw-Sinli ga) と呼称している¹。以下にジンポー語方言の地理的分布を示した図および方言のリストを提示する。

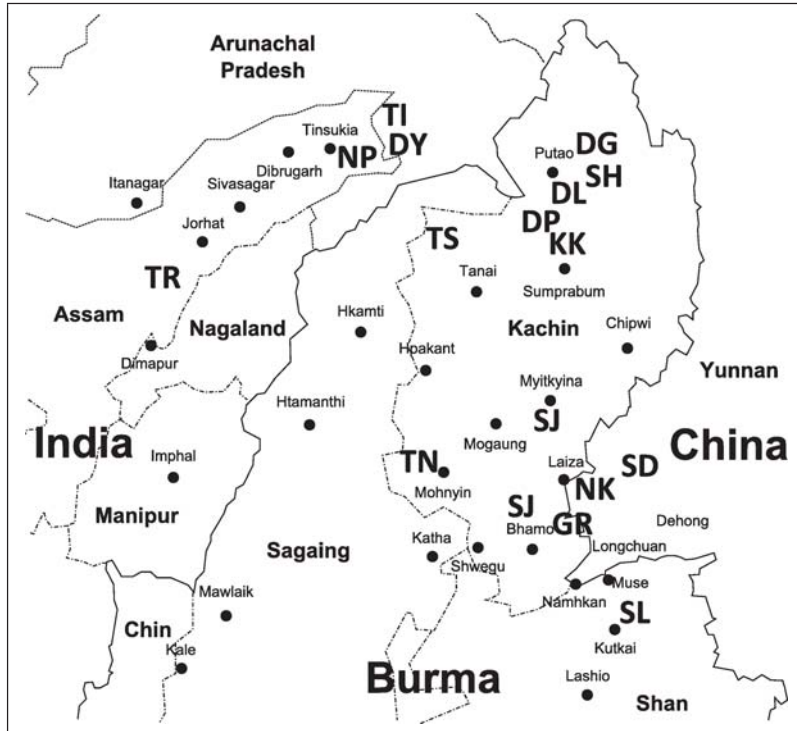


図 1 ジンポー語方言の分布

TR = Turung (India)	KK = Khakhu (Burma)
NP = Numphuk (India)	SJ = Standard Jingpho (Burma)
DY = Diyun (India)	TN = Thingnai (Burma)
TI = Tieng (India)	SL = Sinli (Burma)
TS = Tsasen (India/Burma)	GR = Gauri/Khauri (Burma/China)
DL = Duleng (Burma)	NK = Nkhun/Enkun (China)
SH = Shang (Burma)	SD = Shadan (China)
DG = Dingga (Burma)	JL = Jilí (Burma; extinct)
DP = Dingphan (Burma)	

¹ この名称から標準方言と Sinli 方言が系統的に近い関係にあることが推測されるが、本稿ではこれらを別の方言として扱う。その理由は、両者に重要な相違が観察されるためである。例えば、標準方言では疑問標識 =ʔi が必ず動詞複合の後に現れるのに対し、Sinli 方言ではこの標識が動詞複合の前に現れる。ただし、Sinli 方言の最終的な位置づけは今後の調査に俟たなければならない。

筆者はジンポー語には少なくとも3つの方言群が存在すると考える。現代諸方言の共通祖先であるジンポー祖語は、最も初期に南部ジンポー祖語と北部ジンポー祖語に分岐し、続いて、北部ジンポー祖語は東北ジンポー祖語と西北ジンポー祖語に分岐したと推定する。本稿ではこれらをそれぞれ、南部方言群 (SJ、NK、GR)、東北方言群 (DL、SH、DG)、西北方言群 (NP、TR) と呼称する。後二者は地理的・言語的により近い関係にあるものの、相違が激しいことからそれぞれ独立のグループとして扱う。各方言群間では相互理解が困難と見られ、これらは言語学的には方言ではなく別言語と見なすべきかもしれない。上記三分割を支持する証拠には、規則的・不規則的な音韻改新の共有 (特定語彙にのみ観察される祖語の末子音 *-k の脱落など)、語彙改新の共有 (以下の表)、文法改新の共有 (一致標識の消失など)、意味改新の共有 (*牙 > 歯など) がある (倉部 2013b、Kurabe 2014)。一例として、以下にジンポー語方言を南部と北部に分断する語彙の例を提示する²。

表1 南部方言群と北部方言群の語彙の一例

	‘earthquake’	‘beautiful’	‘make’	‘in’
SJ	nnaŋnòn	tsom	gəlo	ʔè
NK	nnaŋnòn	tsom	kəlo	è
GR	nnaŋnòn	tsom	gəlo	ʔi
DL	dum	çòp	çəco	ʔaŋ
DG	dum	sòp	çəco	ʔaŋ
NP	dum ⁴ sun ¹	soop ³	səjoo ¹	aŋ ⁴
TR	dum ³ sun ¹	sop ¹	səjoo ¹	aŋ ²

ジンポー語の危機度は方言により異なる。例えば、標準方言は全世代の話者に使用され、ある程度安定している (safe)。一方で、Shang 方言は両親世代かそれ以上の世代でしか使用されないという (definitely endangered)。また、Jilí 方言は 1800 年代の記録 (Brown 1837:1033) を最後に消滅した (extinct)。標準方言は諸方言の中では最も安定していると考えられるが、van Driem (2001:394) が指摘するように、どの方言であれ、カチン内部の様々な共同体で用いられる、ピジン化し文法的に単純化した共通語としてのジンポー語からの影響は避けられないと考えられる。

ジンポー語の分布域は多言語地域である。基本的に、ビルマのジンポー語話者は少なくともビルマ語との二言語併用、中国のジンポー語話者は少なくとも漢語との二言語併用、インドのジンポー語話者は少なくともアッサム語との二言語併用状態にあると考えられる。標準方言に関しては、特に若年層話者にビルマ語とのコードスイッチングが頻繁に観察される。また、東北インドに分布する Turung 方言は、アッサム語の強い影響下にあるとされる (Morey 2010:8)。

² 表中、Nkhum 方言 (NK) の形式は徐他 (1983) からの二次資料であり、また、Turung 方言 (TR)、Numphuk 方言 (NP) の形式はそれぞれ、Morey (2007a)、Morey (2007b) からの二次資料である。なお、Shang 方言 (SH) は共通の音韻改新などの証拠から北部方言群に属すると考えられるが、現時点においては語彙資料が少ないため、表には含めていない。

1.4 本稿の表記

本稿におけるジンポー語表記は、以下に示す筆者の分析による音素表記を用いる。ただし、成節鼻音は後続子音と調音点同化を起こすが、本稿ではすべて /n/ と表記することにする。ジンポー語には正書法も存在するが、正書法では声調と声門閉鎖音が表記されないため、本稿の表記には正書法を使用しない³。

以下に、筆者の分析によるジンポー語の子音体系を示す⁴。

表2 子音体系

	onset consonants				coda consonants			
voiceless unaspirated stops	p	t	k	ʔ	p	t	k	ʔ
voiceless aspirated stops	ph	th	kh					
voiced stops	b	d	g					
voiceless affricates	ts	c						
voiced affricate	dz	j						
voiceless fricatives	s	ç						
nasals	m	n	ŋ		m	n	ŋ	
preglottalized nasals	ʔm	ʔn	ʔŋ					
liquids	r	l						
preglottalized liquids	ʔr	ʔl						
glides	w	y			w	y		
preglottalized glides	ʔw	ʔy						

母音には次表に示す6つの母音がある。母音は基本的に大部分の末子音と自由に結合するが、/ə/は末子音とは決して結合しない。また、末子音 /w/ は /a/ とのみ結合し、末子音 /y/ は /a, o, u/ とのみ結合する。本稿では、正書法で *au*、*ai*、*oi*、*ui* と表記される二重母音をそれぞれ、/aw/、/ay/、/oy/、/uy/ と分析する。その根拠は、これらの連続が閉音節に決して現れないためである。このような音韻解釈を行うことにより、ジンポー語の最大の音節構造を C₁C₂VC₃/T へと還元することが可能になる (Cは子音、Vは母音、Tは声調を示す)。なお、末子音 /k/ は出現頻度が極めて低いが、これは標準方言においてジンポー祖語の末子音 *k が ʔ へと音変化したためである。

³ 正書法は1890年にカチン州に赴任した米国バプティスト派の宣教師 Olaf Hanson により1890年代前半に考案され、ローマ字による文字体系を持つ。これより以前にビルマ文字、シャン文字、カレン文字の組み合わせによるジンポー文字が Josiah Cushing により考案されつつあったがこれは普及しなかった (Crider 1963:368, 371)。

⁴ 特に若年層話者は /ts/ を無声無気歯茎摩擦音 [s]、/s/ を無声有気歯茎摩擦音 [s^h]、/dz/ を有気歯茎摩擦音 [z] で発音する傾向が強い。

表3 母音と末子音の結合可能性

	-∅	-p	-t	-k	-ʔ	-m	-n	-ŋ	-w	-y
-a	-a	-ap	-at	-ak	-aʔ	-am	-an	-aŋ	-aw	-ay
-e	-e	-ep	-et	-ek	-eʔ	-em	-en	-eŋ	*-ew	*-ey
-i	-i	-ip	-it	-ik	-iʔ	-im	-in	-iŋ	*-iw	*-iy
-o	-o	-op	-ot	-ok	-oʔ	-om	-on	-oŋ	*-ow	-oy
-u	-u	-up	-ut	-uk	-uʔ	-um	-un	-uŋ	*-uw	-uy
-ə	-ə	*-əp	*-ət	*-ək	*-əʔ	*-əm	*-ən	*-əŋ	*-əw	*-əy

ジンポー語は音節声調を持ち、以下のミニマルペアにより実証されるとおり、開音節において4つの声調が対立し、閉音節において2つの声調が対立する。なお、成節鼻音 /n/ には音声的には高、中、低の3つの声調が実現するが、これらは2つの基底の声調に還元可能である(倉部2013a)。ただし、本稿の表記は音素表記であるため、表層の3つの声調を全て表記する。また、成節鼻音と同様の分析が /ə/ を主母音とする音節に適用可能である可能性があるが、この声調により弁別されるミニマルペアがほとんど存在しないため、本稿ではこの音節に声調を表記しないことにする。

表4 声調と語例

L	/yò/	[yo\]	‘to be worn out’
M	/yo/	[yo-]	‘to float’
H	/yó/	[yō]	‘to plan’
F	/yô/	[yo\]	‘SENTENCE-FINAL PARTICLE’
L	/gàt/	[gat\]	‘to run’
H	/gát/	[gat̄]	‘market’

2 本文

本節では民話資料本文を提示する。本節で提示する民話は、筆者が2009年から2014年にかけて10回に渡り、ビルマに渡航した際に収集した資料のひとつである。本資料は2011年3月にカチン州ミッチーナ市において、Du Kahtawng 地区の男性(当時70代)から対面調査により収集したものである。調査では、まず筆者が話者宅に出向き、面接して民話の録音を行った。録音ではリニアPCMレコーダー(ZOOM H4n)にマイク(audio-technica AT9904)を接続して音声を取り込んだ。録音時のサンプリング周波数は44.1KHz、量子化ビット数は16bitである。続いて、筆者がその資料を書き起こし、翌日、調査協力者の協力を得て、グロスと文法注釈を付した。調査時の主な媒介言語はジンポー語であるが、ビルマ語も補助的に用いた。

資料本文の全体像を先取りする目的で、次に話の概要を先に記しておく。「昔、人間の唾には驚くべき力があつた。それは、唾を吐いて願うと実際にその願いが叶うという力であつた。ただし、唾を吐かないのであれば必ず飲み込まなければならない。そうしなければ唾の力は消え失せてしまう。精霊たちは人間の唾の力を恐れ、その力を失わせることを目論んだ。精霊たちは笛を作り、人間が通る道に置いておいた。人間がその笛を見つけて吹くと大変心地よい音が出た。笛を吹き続けると唾がポタポタ落ち、ついには人間の唾の力はなくなってしまった」。この種の俗信がどの程度通用しているかは不明であるが、筆者が20代の話者にインタビューしたところ、幼少時に森に入る際、精霊が現れないよう唾を吐いたことがあるということであった。

(1) myì??yen phòy=màt=?ay lam.
saliva lost=COMPL=NMLZ.NCS way
「唾の力がなくなったこと」

(2) yá? ɕoŋ=dè? tsun=lây=wà=say=thè? mərən
now before=ALL say=PASS=COME=NMLZ.CS=COM same
jìŋphò?+màwmù y grày ló=?ay.
Jingpho+story very many=TAM.NCS
「いま話して来たとおりの、ジンポーの民話はとてもたくさんある。」

(3) nday=kó? mətɕiŋ=dá rà=?ay ləŋây+mi ɲà=?ay.
this=LOC remember=RESL need=NMLZ.NCS one+one exist=TAM.NCS
「この中で覚えておくべきものがひとつある。」

(4) mòy+ɕoŋ=dè? ɕiŋgyim+məçà=ni ñnan làt=?ay ɕəlóy=gò
before+before=ALL human+human=PL newly born=NMLZ.NCS when=TOP
ɕiŋgyim+məçà=ni=?à? ñgùp=kó?=ñná pru=?ay myì??yen
human+human=PL=GEN mouth=LOC=SEQ come.out=NMLZ.NCS saliva
grày mau+pha ñgùn roŋ=?ay=dà?
very wonder+what power contain=TAM.NCS=HS

「昔、人間が最初に誕生したとき、人間の口から出る唾には大変驚くべき力があったそうだ。」

- (5) nday myiʔʔyen ŋa=ʔay=gò dàyní=ná mà=ni=gò məʔyen
 this saliva say=NMLZ.NCS=TOP today=GEN child=PL=TOP saliva
 mòy=ná ji+ʔwoy=ni=gò myiʔʔyen=ŋú tsun=ʔay rê.
 before=GEN grandfather+grandmother=PL=TOP saliva=QUOT say=NMLZ.NCS COP
 「この唾というものを今日の子供たちは məʔyen と発音し、昔の祖先たちは myiʔʔyen と発音した。」

- (6) myiʔʔyen+myiŋ ŋú-ŋú məʔyen+myiŋ ŋú-ŋú mərən=çà rê.
 saliva+name say-REDP saliva+name say-REDP same=ADV COP
 「myiʔʔyen と発音しようが、məʔyen と発音しようが同じものだ。」

- (7) dai=ni ʔánthe ce+nà=ʔay.
 that=PL 1PL know+hear=TAM.NCS
 「(どう発音しようが) それらを私達は理解できる。」

- (8) mòy+çəŋ=dèʔ=gò myiʔʔyen nday grày reŋ=ʔay.
 before+before=ALL=TOP saliva this very fine=TAM.NCS
 「昔、この唾はとても優れていた。」

- (9) çìŋgyim+məçà=ni=ʔàʔ ñgùp=kóʔ=ñná pru=ʔay myiʔʔyen.
 human+human=PL=GEN mouth=LOC=SEQ come.out=NMLZ.NCS saliva
 「人間の口から出る唾は。」

- (10) myiʔʔyen məthó=dàt=ñná day byin=ʔùʔgàʔ wórà byin=ʔùʔgàʔ
 saliva spit=RELEASE=SEQ that happen=OPT that happen=OPT
 ŋú=jàŋ gəja=wà byin=ʔay.
 say=if good=ADV happen=TAM.NCS
 「唾を吐いてそれが起これ、あれが起これと言え、本当に起こる。」

- (11) thórà wa thèn+rùn=wà=ʔùʔgàʔ si=ʔùʔgàʔ ŋú=ñná myiʔʔyen=phéʔ
 that man broken+demolished=COME=OPT die=OPT say=SEQ saliva=ACC
 məthó=dàt=ʔay=thèʔ raw gəja=wà byin=ʔay=dàʔ.
 spit=RELEASE=NMLZ.NCS=COM together good=ADV happen=TAM.NCS=HS
 「あの人が滅びますように、死にますようにと言って唾を吐くと同時に本当に起こったそうだ。」

- (12) ráy tíʔ=mùŋ nday=kóʔ khùm=dá=ʔay lam ləŋây+mi ñà=ʔay.
 COP but=also this=LOC prohibit=RESL=NMLZ.NCS way one+one exist=TAM.NCS
 「しかしながら、ここには禁じられていることがひとつあった。」

- (13) ʔə-jàʔ=wà khùm=dá=ʔay lam ləŋây+mi ɲà=ʔay.
 ADV-hard=ADV prohibit=RESL=NMLZ.NCS way one+one exist=TAM.NCS
 「固く禁じられていることがひとつあった。」
- (14) ɕiŋgyim+məçà=ni myìʔʔyen=phéʔ ɲgùp=kóʔ=ɲná ɕiŋgàn=dèʔ
 human+human=PL saliva=ACC mouth=LOC=SEQ outside=ALL
 n-ɕə-pru lù=ɲná myìʔʔyen lóʔ=wà=jàŋ
 NEG-CAUS-come.out get=SEQ saliva many=COME=if
 məʔút=káu rà=ʔay.
 swallow=THOROUGHLY need=TAM.NCS
 「人間が唾を口から外に出せずに唾が多くなってきたら飲み込まなければならない。」
- (15) ɕiŋgàn=dèʔ gəjì=mùŋ n-ɕə-pru may=ʔay.
 outside=ALL small=also NEG-CAUS-come.out okay=TAM.NCS
 「外に少しも出してはならない。」
- (16) ɕiŋgyim+məçà=ni myìʔʔyen=wa ɕiŋgàn=dèʔ
 human+human=PL saliva=TOP outside=ALL
 pru=wà=ʔay=kóʔ=ɲná=gò phòy=màt=na rê
 come.out=COME=NMLZ.NCS=LOC=SEQ=TOP lost=COMPL=NMLZ.IRR COP
 ɲú=ʔay məsàt+məsa+mədin+məlai ɲà=ʔay=dàʔ.
 say=NMLZ.NCS mark+COUP+partition+COUP exist=TAM.NCS=HS
 「人間が唾を外に出したときから (唾の力が) 消えてしまうという禁止事項があったそ
 うだ。」
- (17) dai ʔətèn=thàʔ ndai nát numsum+nát ɲú=ʔay n-ju+n-daŋ=ʔay
 that time=LOC this spirit PSN+spirit say=NMLZ.NCS NEG-attack+NEG-choked=NMLZ.NCS
 nát=ni=gò ɕiŋgyim+məçà=ni=ʔàʔ myìʔʔyen grày reŋ=ʔay nday=phéʔ
 spirit=PL=TOP human+human=PL=GEN saliva very fine=NMLZ.NCS this=ACC
 ce=ʔay.
 know=TAM.NCS
 「その時、この精霊、ヌムスムという悪い精霊たちは人間の唾がとても優れていること、
 これを知っていた。」
- (18) day məjò ɕánthe=gò ɕiŋgyim+məçà=ni=ʔàʔ myìʔʔyen=phéʔ khrit=ʔay.
 that because 3PL=TOP human+human=PL=GEN saliva=ACC fear=TAM.NCS
 「だから、彼らは人間の唾を恐れた。」

- (19) ɕiŋgyim+məɕà=ni=?è ɕánthe=ni=phé? si=?ù?gà? thèn+rùn=?ù?gà? ɲú
 human+human=PL=NOM 3PL=PL=ACC die=OPT broken+demolished=OPT say
 myì?ʔyen məthó=dàt=jàŋ gəja=wà si=wà=?ay=phé? khrit=?ay.
 saliva spit=RELEASE=if good=ADV die=COME=NMLZ.NCS=ACC fear=TAM.NCS
 「人間が彼らに死にますように、滅びますようにと言って唾を吐くと本当に死んでしまう
 ことを恐れた。」
- (20) day rê məjò nát=ni pha+bò? gəlo=?ay=?i.
 that COP because spirit=PL what+kind do=TAM.NCS=Q
 「それで精霊たちは何をしたか。」
- (21) nday ɕiŋgyim+məɕà=ni=?à? myì?ʔyen=phé? jə-phòy=káw=ya=na
 this human+human=PL=GEN saliva=ACC CAUS-lost=THOROUGHLY=BEN=NMLZ.IRR
 mətu n-reŋ=màt=na mətu nday numsum+nát nyàn dò=?ay=dà?
 for NEG-fine=COMPL=NMLZ.IRR for this PSN+spirit=PL intellect break=TAM.NCS=HS
 「この人間たちの唾の力をなくしてやるために、劣らせるために、このヌムスムの精霊た
 ちは知恵を絞ったそうだ。」
- (22) ráy=yaŋ ɕánthe gərə=khu gəlo=?ay=?i ɲa=yaŋ kəwá=thè? gəlo=?ay
 COP=when 3PL which=along do=TAM.NCS=Q say=when bamboo=COM make=NMLZ.NCS
 lərûŋ ɲú=?ay dùm=?ay bò? nkaw+mi=gò sumpyi=mùŋ ɲa=?ay
 flute say=NMLZ.NCS play=NMLZ.NCS kind some+one=TOP flute=also say=TAM.NCS
 pyithòt=mùŋ ɲa=?ay pyimàn=mùŋ ɲa=?ay pha+mi ráy-ráy
 flute=also say=TAM.NCS flute=also say=TAM.NCS what+one COP-REDP
 ñgùp=thè? dùm=?ay bò? nday gəlo=wà=ñná
 mouth=COM play=NMLZ.NCS kind this make=COME=SEQ
 ɕánthe yí?+wà+yí?+sa+lám=kó? ɕəná?+ńsín=?è
 3PL swidden+return+swidden+go+way=LOC night+darkness=LOC
 sa tòn=dá=ya=?ay=dà?
 go put=RESL=BEN=NSCM=HS
 「それで彼らはどうしたかということ、竹で作った lərûŋ という吹くもの、一部の人は
 sumpyi とも呼ぶ、pyithòt とも呼ぶ、pyimàn とも呼ぶ、何はともあれ口で吹くもの、こ
 れを作って来て畑へ行く道に夜の暗闇に行っておいてやったそうだ。」
- (23) day ɕəlóy jəphòt ɕəní+ńthóy+ʔətèn=thà? ɕiŋgyim+məɕà=ni lam+ńtsa=khu
 that when morning day+day+time=LOC human+human=PL way+upon=along
 lày=wà=?ay ɕəlóy day kəwá=thè? gəlo=dá=?ay lərûŋ=phé?
 pass=COME=NMLZ.NCS when that bamboo=COM make=RELS=NMLZ.NCS flute=ACC
 mù=mà=?ay=?ay=dà?
 see=PL=TAM.NCS=HS

「その時、朝の時間に、人間たちが道の上を通るとき、その竹で作ってある笛を見つけた
 そうだ。」

(24) mù=yay ɕánthe lərûŋ=phé? thà? yu=?ay.

see=when 3PL flute=ACC pick look=TAM.NCS

「見つけると彼らは笛を拾って見た。」

(25) thà? yu=?ay ɕəlóy=gò ɕoŋ=dè? ní-mû=yu rê məjò pha+bò?

pick look=NMLZ.NCS when=TOP before=ALL NEG-see=TRY COP because what+kind

gəlo=dá=?ay=?i nday=phé? lòy mù reŋ=?ay dzòn=gò rê=?è ŋú

make=RELS=TAM.NCS=Q this=ACC a.little see fine=NMLZ.NCS like=TOP COP=SFP say

yu=khray yu ?ədzi yu=nná ɕəlaw=yu məthi?=yu yu=yu phaŋ+jəthùm=yay

look=only look gaze look=SEQ turn.over=TRY pinch=TRY look=TRY after+last=when

ngùp=thè? dəgró?=nná gəwùt=yu=?ay=dà.

mouth=COM put.on=SEQ blow=TRY=TAM.NCS=HS

「拾って見たとき、以前に見たことがなかったので、何が作ってあるのだろう、これは少し見る価値がありそうだと行って、見るだけ見て、見つめ裏返して、摘まんでみて、見てみて、最後には口に入れて吹いてみたそう。」

(26) ngùp=thè? dəgró?=nná gəwùt=yu=?ay.

mouth=COM put.on=SEQ blow=TRY=TAM.NCS

「口に入れて吹いてみた。」

(27) ɕəlóy grày pyo=?ay ñsén pru=wà=?ay=dà?

when very comfortable=NMLZ.NCS sound come.out=COME=TAM.NCS=HS

「するととても心地の良い音が出てきたそう。」

(28) day lərûŋ=kó?=nná.

that flute=LOC=SEQ

「その笛から。」

(29) day=kó?=nná ɕiŋgyim+məɕà day=ni myi??yen myi??yen=thè? lərûŋ dùm=?ay

that=LOC=SEQ human+human that=PL saliva saliva=COM flute play=TAM.NCS

ŋú=nná myi??yen=phé?=è məthó=khray məthó gəwùt=khray gəwùt=?è

say=SEQ saliva=ACC=SFP spit=only spit blow=only blow=SFP

gəthè?=káv=?ay=kó?=nná ɕiŋgyim+məɕà=ni=?à?

drip=THOROUGHLY=NMLZ.NCS=LOC=SEQ human+human=PL=GEN

myi??yen=gò n-reŋ=màt=say=dà?

saliva=TOP NEG-fine=COMPL=TAM.CS=HS

「それから、その人間たちは唾、唾で笛を吹くと言って、唾を吐くけるだけ吐き、吹けるだけ吹いて、(唾が)ポタポタ落ちてしまってから人間の唾は価値がなくなってしまった

そうだ。」

- (30) gədè məthó+bùn=tím n-rej=màt=say.

how.much spit+sprinkle=but NEG-fine=COMPL=TAM.CS

「いくら吐き散らしてももう価値がなくなってしまった。」

- (31) ráy tí?=mùŋ yá?+pràt=ná rām+mà=ni nday lam=thè? seŋ=nná

COP but=also now+period=GEN youth+child=PL this way=COM related=SEQ

mətsiŋ rà=?ay lam ləŋây+mi=gò òà=?ay.

remember need=NMLZ.NCS way one+one=TOP exist=TAM.NCS

「ただし、現代の若者たちはこの話に関して覚えておかなければならないことがひとつある。」

- (32) mòy=ná jìŋphò?=ni nát+jò?+pràt=ná jìŋphò?=ni

before=GEN Jingpho=PL spirit+give+period=GEN Jingpho=PL

məçà ləŋây+mi=phé? myì??yen məthó=khray məthó+bùn=?ay=gò

man one+one=ACC saliva spit=only spit+sprinkle=NMLZ.NCS=TOP

məçà ləŋây+mi yùk=mərù?=?ù?gà? òú=?ay=khu rê.

man one+one lose.luck=?=OPT say=NMLZ.NCS=along COP

「昔のジンポー人、精霊信仰をしていた時代のジンポー人たちにとっては、人に唾を吐けるだけ吐き散らすのは人に不幸になれると言っているようなものだった。」

- (33) grày çə-rej=mà?=?ay.

very CAUS-fine=PL=TAM.NCS

「唾をととても大切にしていた。」

- (34) məjoy+mi məçà=phé? cí?=?à? çìŋdù?=dè?=nná tsan=?ay=kó?=?nná

no.purpose+one man=ACC 3SG.GEN=GEN behind=ALL=SEQ far=NMLZ.NCS=LOC=SEQ

ráy-ráy ?əmyiŋ gaŋ=nná myì??yen n-may məthó=?ay.

COP-REDP name pull=SEQ saliva NEG-okay spit=TAM.NCS

「むやみに人に彼の背後から遠いところからであれ、名前を挙げて唾を吐いてはならない。」

- (35) məçà ləŋây+mi=phé? myiŋ gaŋ mətsa=lèt myì??yen məthó+bùn=jàŋ

man one+one=ACC name pull curse=while saliva spit+sprinkle=if

məthó+bùn=khom=?ay wa çəwá?=?çá

spit+sprinkle=MOVE=NMLZ.NCS man impose.fine=EMPH

mənàməkà gùmçèm may=?ay.

extremely severe okay=TAM.NCS

「人ひとりを名前を挙げて呪いながら唾を吐くと、唾を吐いて回った人には大変重い罰金を課してよい。」

- (36) day rê mǝjò mǝy=ná=ni=gò myì??yen=phé grày ɕə-reŋ=màʔ=?ay.
 that COP because before=GEN=PL=TOP saliva=ACC very CAUS-fine=PL=TAM.NCS
 「そのために昔の人たちは唾をととても大切にした。」

3 文法注釈

本節では本文に対する文法注釈を提示する。以下の番号は本文に付した番号と対応している。

1. phòy は「力、運、栄光、名誉、味などが失われる」という意味を表す動詞である。以下のよ
 うな例がある (Hanson 1906:548)。

- (37) màndan phòy=say.

charm lost=TAM.CS

「呪文の力が失われた。」

- (38) ɕíʔ=?àʔ ?əroŋ phòy=màt=say.

3SG.GEN glory lost=COMPL=TAM.CS

「彼の名誉が損なわれてしまった。」

- (39) sì phòy=màt=say.

fruit lost=COMPL=TAM.CS

「果物がおいしくなくなった。」

完了を表す助動詞 =màt は動詞 màt 「無くなる」の文法化により発展した形式である。ジン
 ポー語にはこの種の文法化した動詞が非常に多いが、それらの詳細は倉部 (2010) を参照。

=?ay は非変化相 (non-change-of-state; NCS) の名詞節を形成する標識である。名詞節を形成
 する標識には他に、=say と =na がある。=say は変化相 (change-of-state; CS) の名詞節を形成す
 る標識であり、=?ay と対立しながら相体系を構成する (3 節 29 も参照)。一方、=na は非現実
 (Irrealis; IRR) のモダリティを持つ名詞節を形成する標識である (3 節 16 を参照)。これら名詞
 節は本文の例のように主要部名詞を修飾するという関係節的機能も果たし、ジンポー語の関係
 節は名詞節の一種であると分析することが可能である。関係節と名詞節が同一標識により形成
 される現象は他のチベット・ビルマ系言語に広く観察される現象として知られている (Matisoff
 1972)。

ジンポー語の民話のタイトルは lam 「道、こと」を主要部とした名詞節または名詞句である場
 が多い。例えば、ジンポー語の民話集である *Kachin Reader 1* (Hanson Memorial Press) は全
 38 話中 34 話のタイトルがそうであるし、*Kachin Reader 2* (Hanson Memorial Press) では収録
 された 40 話全てのタイトルがそうになっている。

2. 格標識 =dèʔ は着点を標示する向格であるが、この文のように場所・時間を標示することが

ある。この種の =dè? は「前、後」などの意味を表す場所名詞や「朝、夜」などの意味を表す時間名詞に付加される場合が多い(倉部 2012b)。類例は、#4、#25 に見られる。=dè? が着点を標示する本文中の例には、#14、#15、#16 がある。

=lày=wà=say は分析的には「=過ぎる=帰る=NMLZ.CS」であるが、全体で「ずっと～してきた」という時間的継続を表す。=lày は本来「過ぎる」を意味する動詞であるが、意味の抽象化が見られるため本稿では助動詞として扱い、グロスをスモールキャピタルにしておく。助動詞 =wà は単独では「帰る」を意味する動詞であるが、本動詞と共に用いられると「～てくる」という移動方向を表す。

TAM 標識 =?ay は非変化相の平叙文を形成する標識であり、変化相を示す TAM 標識 =say と対立しながら相体系を構成する。変化相は、開始点であれ終結点であれ、事態・状況が新しい局面に変化したことを現在のこととして述べる場合に用いられ、これ以外の事態・状況は非変化相の =?ay により表示される。この形式は名詞節化標識 =?ay と同形であり、これらは同源語であると考えられる。ただし、これらは機能が異なるため、本稿では別のグロスを付しておく。形式が同一であることを根拠としてこの言語の平叙文を名詞節と分析できる可能性がある。

3. =kó? は場所を標示する位格標識である。この形式が現れる例には、#4、#9、#12、#14、#16、#28、#29、#34 がある。位格標識には他に =thà? や =?è という形式もある。=thà? は基本的に時間を標示する形式である(倉部 2012b)。本文中に見られる =thà? の例として、#23、#17 がある。=?è の文法的特徴は現時点では不明であるが、母語話者によるとこの形式は文語で用いられる形式であるという。この形式と他の形式はスタイルにしたがって使い分けられるものと考えられる。

=dá は単独で「置く」を意味する動詞であるが、本動詞と共に用いられると結果相を示す助動詞として機能する。

rà は「必要だ」という意味を表す動詞であるが、他の動詞とともに用いられる場合には義務のモダリティを表す。この形式が動詞であり助動詞でないことはこの動詞に直接、否定辞 í- を付加することができることにより分かる。例えば、本文の mət̚siŋ=dá rà (remember=RESL need) 「覚えておくべき」は mət̚siŋ=dá í-râ というように否定することができる。

4. mòy+çon̩ (before+before) は類義語から構成される並列複合名詞である。特に文語ではこの種の類義語や反義語から成る並列複合語が多く出現し、この種の複合語はジンポー語文法において無視できない地位を占めている。並列複合語の配列順序はある程度予測可能である。配列順序には次の 3 つの法則が関与している(倉部 2011)。

- 法則 1：各構成要素の音節数が同一で、かつ、構成要素間で母音の広さが異なる場合、相対的に狭い母音を含む要素は、相対的に広い母音を含む要素に先行する。
- 法則 2：各構成要素の音節数が異なる場合、短い要素は長い要素に先行する。
- 法則 3：構成要素が固有語と借用語からなる場合、固有語は借用語に先行する。

これらのうち、法則 3 のランキングが最も高く、次に法則 1 と法則 2 が働く。例えば、*gə̀nù+gə̀wà* (mother+father) 「両親」では女性が男性に先行するのに対し、*gə̀ji+gə̀woy* (grandfather+grandmother) 「祖父母」では男性が女性に先行しているが、この配列には法則 1 が関与していると考えられる。同様に、*gə̀phù+gə̀naw* (elder.bro+younger.bro) 「兄弟」では年上が年下に先行するのに対し、*gə̀çù+gə̀çà* (grandchild+child) 「子孫」では年下が年上に先行するが、この配列にも法則 1 が関与している。一方、*mà+gə̀çà* (child-child) 「子供達」、*tsáʔ+cə̀rù* (rice.wine+liquor) 「酒等」、*phún+kə̀wá* (tree+bamboo) 「木々」、*jum+mə̀jə̀p* (salt+red.pepper) 「香辛料」、*dùt+məri* (sell+buy) 「売り買いする」などの例に観察される配列には法則 2 が関与している。このように、並列複合語の配列には意味的要因ではなく語種や音韻などの要因が関与的である。

ただし、上記の法則から本文中の *mòy+çə̀ŋ* の順序を予測することはできない。この種の各構成要素の音節数が同一で、かつ、構成要素間で母音の広さが同一の場合、構成要素がどのように決定されるかに関しては現時点では不明である。本文中の並列複合語は他に、#5、#11、#16、#22、#23、#25 などに見られる。

çə̀lòy は単独で「その時」という意味を表すが (#27 を参照)、名詞 (関係) 節に修飾されると時を表す副詞節を形成する。

ジンポー語には *=ná* と *=ʔàʔ* の二種の属格標識がある。属格 *=ná* は基本的に場所・時間に付加される (#5、#31、#32、#36)。一方、属格 *=ʔàʔ* はそれ以外の名詞に付加される (#9、#17、#18、#21、#29、#34)。ただし、若年層話者は先行名詞に関わらず専ら *=ná* を用いる傾向にある。また、東北インドに分布する方言である *Turung* や *Numphuk* のように、属格標識として *=ná* のみを持つ方言も観察される。

起点は基本的に位格に継起を表す形式 *=̀̀ná* を付加することによって標示される (類例として、#9、#14、#16、#28、#29、#34 がある)。*̀̀ná* は *ná* と同発音され、属格標識 *=ná* も同源語であると考えられる。*=̀̀ná* は動詞にも付加することができ、この種の例は本文中 #10、#11、#14、#22、#25、#26、#29、#31、#34 に見られる。

pha は単独で「何」を意味する疑問語であるが、本文の例のように動詞と複合して動詞を名詞化する機能も果たす。

5. 「唾」を意味する語は *myìʔʔyen* または *mə̀ʔyen* と発音され、*myìʔʔyen* が古形であるという。ジンポー語は後者の形式のような弱強格 (iamb) を好む言語であり、二音節語基礎語彙の 83% はこの構造を持つ (倉部 2012a)。このため特に口語において二音節強強格の語が二音節弱強格で発音される例が散見される。例えば、*gìnsùp* → *gə̀sùp* 「遊ぶ」、*çìngrùp* → *çə̀grùp* 「囲む」、*mìwà* → *mə̀wà* 「漢族」、*gùpcóp* → *gə̀cóp* 「帽子」などの例がある。このような交替を示す語彙の中には、本来は強強格の構造を持っていたものが大部分の話者では専ら弱強格でのみ発音される語もある。例えば、*çìnyên* 「カメレオン」、*sìnlù* 「水蒸気」、*sùmmyít* 「針」などの語は、大部分の話者にはそれぞれ *çə̀nyên*、*sə̀lù*、*sə̀myít* と発音され、強強格の形式は一部の高齢層の話者にしか知られていない。本稿で言及のある「唾」もこのような例の一種であると考えられる。なお、

「唾」の弱強格形 (məʔyen) の第一音節では本来の形式 (myiʔʔyen) の介子音 -y- が脱落しているが (*myəʔyen)、これはジンポー語では母音 ə が子音結合を頭子音に取ることができないという制約があるためである (倉部 2012a)。

引用節を形成する =ŋú は動詞 ŋú 「言う」が文法化して発展した形式である。本文中、ŋú が動詞として用いられる例には、#6、#10、#11、#16、#17、#19、#22、#25、#29、#32 などがある。これに対して引用節を形成する =ŋú が動詞としての性質を失っていることはこの形式に否定辞を付加することができないことから示唆される。

6. 動詞の重複は「～しようが」という意味の副詞節を形成する。本文中の ŋú-ŋú (言う-REDP) は「～と言おうが」という意味を表す。本文中の他の重複の例としては #22、#34 がある。

=çà は動詞から副詞を派生する形式である。

7. 複合動詞 ce+nà (know+hear) は全体で「理解する」という意味を表す。

8. 本文中のこの文では指示代名詞 nday (this) が主要部名詞の後に現れているが、指示代名詞は主要部名詞の前後どちらに現れることも可能である。例えば、#8 と #29 では指示代名詞が主要部名詞の後に現れるのに対し、#5、#17、#21、#31 では指示代名詞が主要部名詞の前に現れている。指示代名詞の位置によりどのような違いがあるかは現時点では不明である。

10. 希求法を形成する形式には =ʔùʔgàʔ がある。希求文にはいくつかの制約が観察される。まず、この文の主語が人称代名詞である場合、2 人称または 3 人称でなければ容認度が下がる。また、希求文の述語動詞は無意志動詞でなければならず、意志動詞は lù 「できる」により無意志化した後でないと希求文の述語動詞として用いることができない。

=wà は動詞から副詞を派生する形式である。本文中 gəja=wà (good=ADV) は全体で「本当に」という意味を表す。

11. 共格標識 =thèʔ と副詞 raw (together) の組み合わせは「～するやいなや」という意味の副詞節を形成する。

12. ráy tíʔ=mùŋ (COP but=also) は全体で「しかし」という意味を表す。「しかし」という意味を表す場合、コピュラ動詞 ráy は必須ではないが現れることが多い。tíʔ=mùŋ は tím と短縮されて発音されることも多い。例えば、#30 の例では短縮形が現れている。

13. ʔə- は動詞から副詞を派生する接頭辞である。本文の例のようにこの接頭辞は副詞を派生する別の形式である =wà とセットで用いられることがあるが、=wà は必須ではない。接頭辞 ʔə- による動詞からの副詞派生の例として他に以下のような例がある (ʔə- が付加されると語幹の L は F へと変調する): tsòm 「美しい」 → ʔə-tsòm 「よく」、ŋùý 「穏やかな」 → ʔə-ŋùý 「穏や

かに]、sàn「綺麗な」→ʔə-sân「綺麗に」、ɕim「静かな」→ʔə-ɕim「静かに」、gəjòŋ「驚く」→ʔə-gəjòŋ「突然」。最後の例のように接頭辞 ʔə- は二音節語にも付加可能であるが、mərèn「同様だ」→ʔə-mərèn、gəja「よい」→ʔə-gəja のように二音節語に付加すると容認度が下がることがある。どのような場合に容認されるかに関しては現時点では不明である。

14. =phéʔ は対格標識である。目的語の標示には対格と絶対格の交替が認められる。対格の機能には主語と目的語を差異化する機能、および、目的語を明示化する機能の二種の機能が認められる。差異化や明示化が必要でない場合、基本的に目的語は絶対格で現れる(倉部 2012b)。

否定辞は [ń] と [n] の二種の異形態を持ち、これらは相補分布を成す。異形態 [ń] は L または H を持つ語幹に付加される場合に出現し、異形態 [n] は M を持つ語幹に付加される場合に出現する。また、否定辞が付加されると L を持つ語幹は F へと変調する。なお、この変調が起こる範囲は後続音節までである (e.g., ń-dĩŋsà → [ń-dĩŋsà]「古い」cf. *[ń-dĩŋsà]). また、否定辞が F を持つ語幹に付加される例は観察されないが、これはそもそも F で始まる動詞が存在しないためである。

- ń-lù → [ń-lù]「得ない」
- ń-lá → [ń-lá]「取らない」
- ń-sa → [n-sa]「行かない」

本稿では否定辞の基底形として ń- を立てる。その根拠は、この異形態の分布が相対的に広いこと、および、語幹の L の F への変調を自然に説明することができることによる。逆に、基底形 n- を立てるならば、L と H の直前という 2 つの環境において否定辞の M が H に変調するという規則を立てねばならず非経済的である。また、後者の分析により想定される M → [H]/__ L という変調は音声的にも自然ではない。なお、本稿の表記は音素表記であるため、本稿では変調後の形式を表記している。

使役動詞を派生する接頭辞には、jə- と ɕə- の二種の異形態がある。これら異形態は相補分布を成し、前者は頭子音に s または ɕ または有気閉鎖音を持つ語幹に付加され、後者はそれ以外の頭子音を持つ語幹に付加される。例として以下の表を参照されたい。

Stem	Meaning	jə-	ɕə-
thóy	‘bright’	jə-thóy	*ɕə-thóy
sù	‘wake’	jə-sù	*ɕə-sù
ɕút	‘mistake’	jə-ɕút	*ɕə-ɕút
tay	‘become’	*jə-tay	ɕə-tay
dik	‘satisfied’	*jə-dik	ɕə-dik
tsom	‘beautiful’	*jə-tsom	ɕə-tsom
dzim	‘calm’	*jə-dzim	ɕə-dzim
nà	‘hear’	*jə-nà	ɕə-nà
lóʔ	‘many’	*jə-lóʔ	ɕə-lóʔ
rùn	‘demolished’	*jə-rùn	ɕə-rùn
ʔyúp	‘sleep’	*jə-ʔyúp	ɕə-ʔyúp

本稿では、より分布の広い ɕə- を基底形に立てる。使役接頭辞 ɕə- の分布において s および ɕ が有気閉鎖音と同一の類を成すことを根拠として、ジンポー語において s および ɕ が音韻論的には有気音であると分析しうる。実際に、s は音声的にも [s^h] と発音される。また、ジンポー語の子音体系では c の有気音がギャップになっている。この事実は、ɕ が音韻論的には c の有気音であることを示唆する。ただし、本稿では音声実現を重視し、ɕ を用いて表記する。以上の分析を取るならば、ジンポー語の阻害音体系は以下のようになる。

	onset consonants	coda consonants
voiceless unaspirated stops	p t k ʔ	p t k ʔ
voiceless aspirated stops	ph th kh	
voiced stops	b d g	
voiceless unaspirated fricative/affricate	s c	
voiceless aspirated fricative/affricate	sh ch	
voiced fricative/affricate	z j	

以上のように音韻分析を行うならば、使役接頭辞 ɕə- が s、ɕ、有気閉鎖音と同一語内に同居しないことは、基底表示において同じ弁別的素性が連続することを禁じる必異原理 (Obligatory Contour Principle) によりブロックされているためであると考えうる。

lù は「得る」という意味を表す動詞であるが、他の動詞の直前または直後に現れると可能の意味を表す。本稿ではこの形式を助動詞とはせず、動詞と見なしている。その根拠は、この形式の直前に否定辞を付加することが可能であるためである。例えば、本文の n-ɕə-pru lù (NEG-CAUS-come.out get) 「出すことができない」は ɕə-pru í-lù と言い換えることも可能である。

15. *may* は「よい」という意味を表す動詞であるが、他の動詞の直前または直後に現れると許可のモダリティを表す。本稿ではこの形式を助動詞とはせず、動詞と見なしている。その根拠は、この形式の直前に否定辞を付加することが可能であるためである。例えば、本文の *n-ɕə-pru may* (NEG-CAUS-come.out okay) は *ɕə-pru n-may* と言い換えることも可能である。

16. 本文中の *məsət+məsa+mədìn+məlai* (mark+COUP+partition+COUP) という例は2つの並列複合語 (*məsət+məsa* と *mədìn+məlai*) から構成される複合語である。この例のように、ジンポー語の並列複合語には無意味要素を含む例が多々観察される。本稿ではこの無意味要素に COUP というグロスを付している。無意味要素と有意味要素は形式的に類似している場合が多いが、これらは語彙的に指定されており、無意味要素の形式を有意味要素の形式から完全に予測することは不可能である。なお、無意味要素は並列複合語の前部要素にも後部要素にもなりうる。有意味要素と無意味要素の順序は3節4. に示した法則に従っている。本文中の例以外の例として、*nàmlo+nàmlàp* (COUP+leaf) 「葉」、*nìjbo+nìjla* (leader+COUP) 「指導者」などの例がある (更なる例は、倉部 2011 を参照)。

=*na* は非現実 (Irrealis; IRR) のモダリティを持つ名詞節を形成する標識である。類例は #21 に見られる。

17. 本文中の *n-ju* (NEG-attack) は語彙化しており、これ全体で「凶暴な」という意味を表す。また、*n-daŋ* (NEG-choked) も語彙化しており、これ全体で「出産時に母子ともに死ぬ」という意味を表す。カチン文化では人間の死に方は詳細に分類され、死に方にしたがって様々な呼び名が与えられている。上記のような死に方は *n-daŋ+si* (NEG-choked+die) と呼ばれ、最も不幸な死に方であると考えられている。この死に方をした女性は精霊 (*nát*) になるとされ、その精霊は *n-daŋ+nát* と呼称される (Hanson 1906:485, Gilhodes 1922:62–5, 181–5, 273)。

20. 複合語 *pha+bòʔ* (what+kind) は全体で「何」を表す。「何」という意味は *pha* 単独でも表しうるが、*bòʔ* と合わせて用いられることも多い。

ジンポー語の疑問文は動詞複合に =*ʔi* または =*ráy* を付加して形成される。前者は真偽疑問文を形成し、後者は疑問語疑問文を形成する形式である。以下のミニマルペアを参照されたい。

(40) *ɕàt ɕá=ʔay=ʔi/*=ráy.*

rice eat=TAM.NCS=Q/=Q

「ご飯を食べましたか。」

(41) *pha ɕá=ʔay=ráy/*=ʔi.*

what eat=TAM.NCS=Q/=Q

「何を食べましたか。」

ところが、本文中の例では =ʔi が疑問語疑問文を形成しているように見える。実は、心内の思考 (#25 を参照) や ɲa=yaŋ (say=when) 「～という」という形式からなる引用節中 (#22 も参照) では、疑問語疑問文は =ráy ではなく =ʔi により形成される。本文中のこの例は心内の思考ではない。以上から、本文の例は ɲa=yaŋ 「～という」という形式が省略された文であると考えられる。

21. 受益・受害の意味を表す助動詞 =ya は動詞 ya 「与える」に由来する。

nyàn dòʔ は直訳では「知恵を折る」であるが、全体で「知恵を絞る」という意味を表す。nyàn はパーリ語起源の語であるがジンポー語へはビルマ語を経由して借用されたと考えられる。

22. nkaw+mi (some+one) は全体で「いくつか、いく人か」を表す。

yíʔ+wà+yíʔ+sa+lám (swidden+come+swidden+go+way) は [[[yíʔ+wà]+[yíʔ+sa]]+lám] という構造を持つ複合名詞である。この複合語の lám を除いた部分は並列複合語であるが、この種の同一要素を含む 4 つの部分からなる並列複合語はジンポー語において多数観察される。例えば、jòʔ+lùʔ+jòʔ+ǰá (give+drink+give+eat) 「ご馳走する」などの例がある (更なる例は倉部 2011 を参照されたい)。

23. =màʔ は主語が複数の場合に用いられる形式である。ただし、これが義務的ではないことは #24 の例などから分かる。#24 では主語が複数であるにも関わらず、=màʔ が現れていない。

25. 助動詞 =yu は動詞 yu 「見る」に由来し、「～したことがある、～してみる」などの経験・試行の意味を表す。この形式は、本文中、ń-mû=yu (NEG-see=TRY) 「見たことがない」では経験の意味を表すのに対して、ǰalaw=yu (turn.over=TRY) 「裏返してみる」、məthiʔ=yu (pinch=TRY) 「摘まんでみる」、yu=yu (look=TRY) 「見てみる」、gəwùt=yu (blow=TRY) 「拭いてみる」では試行の意味を表している。なお、若年層話者では =yu は試行の意味を表すのに用い、経験は =ga という別形式を用いて表すことが多い。

dzòn は「ように」を意味する格名詞 (case noun) である。格名詞は節の主要部たる述語に対する従属部名詞の関係を標示する機能を持ち、格標示形式の一種であるといえるが、格助詞とは異なり、格名詞は助詞の性質のみならず名詞の性質をも併せ持つ。具体的には、格名詞は単独で文を成さない点で助詞と共通するが、属格標示の従属部名詞によって修飾される点では名詞と共通する。この後者の性質を重視し、本稿では格名詞を名詞の一種であると見なす。

29. =say は変化相の平叙文を形成する標識である。この標識は、開始点であれ終結点であれ、事態・状況が新しい局面に変化したことを現在のこととして述べる場合に用いられる。吉田 (2011) などの文献ではこの標識を「過去」を表す標識と記述しているが、以下の例に示すとおり、この標識は時制が過去・現在・未来のいずれかに関わらず用いられることから、この標識は時制を表すものではないと考えられる。

(42) khàʔ ɕín=say.

water bathe=TAM.CS
「もう水浴びをした。」

(43) wà=say=yô.

return=TAM.CS=SFP
「もう帰りますね。」

(44) phótní ɕəta+man ləkhôŋ ráy=say.

tomorrow month+face two COP=TAM.CS
「明日はもう 2 月になる。」

この標識と同形の標識に変化相の名詞節を形成する =say がある。これらは同源語であると考えられるが、機能が異なるため、本稿では別のグロスを付している。

30. 疑問語 gəðè 「いくら」は逆接の副詞節を形成する tím とともに用いられると不定の意味を表す。tím は tíʔ=mùŋ (but=also) の短縮形である (3 節 12. を参照)。

32. nát+jòʔ+prət (spirit+give+period) 「精霊を信仰していた時代」は [[nát+jòʔ]+prət] という構造を持つ複合名詞である。nát jòʔ は全体で「精霊を信仰する」という意味を表す。

34. ɕíʔ (3SG.GEN) は 3 人称単数の属格形である。人称代名詞単数形は独自の属格形を持ち、主要部名詞に対する所有関係を標示することができる。一方、双数形と複数形は独自の属格形を持たず、所有関係は属格標識を用いて表される。人称代名詞のパラダイムを次表に掲げる。

	SG		DU		PL
	NOM	GEN			
1st	ŋay	nyéʔ	ʔán	ʔánthe	
2nd	naŋ	náʔ	nán	nánthe	
3rd	ɕi	ɕíʔ	ɕán	ɕánthe	

人称代名詞属格形は全て声門閉鎖音で閉じられており、歴史的には人称代名詞単数主格形と属格標識 =ʔàʔ の縮約から生じた可能性が高い。ただし、本文中に見られるように人称代名詞単数主格形と属格標識 =ʔàʔ は共起しうる。この場合、属格標識は必須ではない。

なお、人称代名詞複数形は双数形に the 「全て」を付加した形式である点に注意されたい。双数形の方が複数形よりも形態的に単純であることは双数形の形式が本来の複数形であり、後に新しい複数形の形式が成立するに伴い、本来の複数形が双数形へと特化したことを示唆するものと解釈しうる。

35. myij̄ gaŋ (name pull) は全体で「名前を挙げる」という意味を表す。

助動詞 =khom は「～して回る」という意味を表し、動詞 khom 「歩く」に由来する。

記号・略号

1	First person	GEN	Genitive
2	Second person	H	High-level tone
3	Third person	HS	Hearsay
*	Ungrammatical/Ill-formed	IRR	Irrealis
-	Affix boundary	L	Low-falling tone
=	Clitic boundary	LOC	Locative
+	Compound boundary	M	Mid-level tone
/ /	Phonemic representation	NCS	Non-change-of-state
[]	Phonetic representation	NEG	Negative
ACC	Accusative	NMLZ	Nominalizer
ADV	Adverbializer	NOM	Nominative
ALL	Allative	OPT	Optative
BEN	Benefactive	PL	Plural
CAUS	Causative	PSN	Person name
COM	Comitative	Q	Question particle
COMPL	Completive	QUOT	Quotation
COP	Copula	REDP	Relative clause
COUP	Couplet	RESL	Resultative
CS	Change-of-state	SEQ	Sequential
DU	Dual	SFP	Sentence-final particle
EMPH	Emphatic	SG	Singular
F	High-falling tone	TAM	Tense-aspect-mood
GEN	Genitive	TOP	Topic

参考文献

Bradley, David. (1996) Kachin. In Stephen A. Wurm, Peter Mühlhäusler, Darrell T. Tryon eds., *Atlas of Languages of Intercultural Communication in the Pacific, Asia, and the Americas* vol. 2.1. 749–51. Berlin: Mouton de Gruyter.

Brown, Nathan. (1837) Comparison of Indo-Chinese languages. *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 6: 1023–38.

- Crider, Donald M. (1963) The work among Kachins — including Lisus and Nagas. In Genevieve Soward and Erville Soward eds., *Burma Baptist Chronicle* BOOK II. 367–82. Rangoon: Burma Baptist Convention.
- Driem, George van. (2001) *Languages of the Himalayas: An Ethnolinguistic Handbook of the Greater Himalayan Region*. Leiden: Brill.
- Gilhodes, Charles. (1922) *The Kachins: Religion and Customs*. Calcutta: Catholic Orphan Press.
- Hanson, Olaf. (1896) *A Grammar of the Kachin Language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.
- Hanson, Olaf. (1906) *A Dictionary of the Kachin Language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.
- 倉部慶太 (2010) 「ジンポー語における動詞連続の文法化」『地球研言語記述論集』2: 15–37.
- 倉部慶太 (2011) 「ジンポー語における対句表現」『地球研言語記述論集』3: 37–57.
- 倉部慶太 (2012a) 「ジンポー語文法概要および民話資料 —兄弟が湖を動かした話—」『地球研言語記述論集』4: 61–100.
- 倉部慶太 (2012b) 「ジンポー語の格標示」『京都大学言語学研究』31: 133–80.
- 倉部慶太 (2013a) 「ジンポー語における成節鼻音の声調について」『日本言語学会第 146 回大会予稿集』336–41.
- 倉部慶太 (2013b) 「ジンポー語方言のサブグループピングに向けて」『日本言語学会第 147 回大会予稿集』368–73.
- Kurabe, Keita (2014) On the genetic position of Jilí within the Jingpho dialects. Paper presented at the 8th International Conference of the North East Indian Linguistics Society, Don Bosco Institute, Guwahati, Assam, India.
- 劉路編 (1984) 『景頗族語言簡志・景頗語』北京: 民族出版社.
- Matisoff, James A. (1972) Lahu nominalization, relativization, and genitivization. In John Kimball ed., *Syntax and Semantics* 1. 237–57. New York: Seminar Press.
- Matisoff, James A. ed. (1996) *Languages and Dialects of Tibeto-Burman*. STEDT Monograph Series #2. Berkeley: Sino-Tibetan Etymological Dictionary and Thesaurus Project, Center for South and Southeast Asia Studies, University of California.
- Morey, Stephen. (2007a) *Turung – English dictionary*. ms.
- Morey, Stephen. (2007b) *Draft dictionary, Singpho (Numhpuk Hkawng) – English*. ms.
- Morey, Stephen. (2010) *Turung: A Variety of Singpho Language Spoken in Assam*. Canberra: Pacific Linguistics.
- 西田龍雄 (1960) 「カチン語の研究—バモ方言の記述ならびに比較言語学的考察」『言語研究』38: 1–32.
- 徐悉艱・肖家成・岳相昆・戴慶厦編 (1983) 『景漢辭典』昆明: 雲南民族出版社.
- 吉田敏浩 (2011) 「カチン世界」伊東利勝編 『ミャンマー 概説』475–538. 東京: めこん.